

あなたの田んぼは  
大丈夫?!

## 翌年のほ場準備は今秋から始めます

～収穫作業が終わったら翌年の稲作に向けて出来ることをしていきましょう～

ケイ酸は稲づくりに大事な成分  
足りなければ足していこう  
十分にあることは悪くないだろう

土づくりの基本となる「ケイ酸」は秋散布でも流亡が少なく、翌春の作業軽減にもつながります。今年のような曇天、日照不足、高温登熟といった天候不順時に強い味方となるのが「ケイ酸」です。高品質米の安定生産のために「ケイ酸」を散布してください。



成分	ケイ酸17%、リン酸3%
散布量	10aあたり40～60kg
特徴	ケイ酸エースを配合しているため稲の吸収利用率が高い。また機械散布に適した300kgフレコン規格がある。



成分	ケイ酸34%、リン酸20%
散布量	10aあたり40～60kg
特徴	く溶性加里と流亡しにくいケイ酸が配合されている。

2年連続発生

## 青カナ、表土はく離対策

ここ2年ほど田植後の降雨が少なく、青カナや表層はく離により、苗がなぎ倒されたり、除草剤の拡散が阻害され薬害発生したり、残草する圃場が散見されます。

なぜ?

### 発生要因

リン酸肥料の多施用、土壌中の有機物や窒素成分が過多、pHが高いときに発生が盛んになる傾向があります。特に、側条施肥田植を行った場合、施肥位置が浅い、または土が堅い場合など、土壌表面から肥料が見える圃場はカナ発生が多くなります。



やってみよう!!

### この秋できる対策

収穫後直ちに稲わらを均一に散らし「土作り肥料」を散布、生わらの腐熟を促進させます。春耕起に支障が無ければ「浅耕起（耕深10cm以内）」で生わらの腐熟を更に促します。土作り肥料散布時期は、日平均気温10度を切る10月25日頃までに作業を完了させます。

資材名	おばこロマン大地
施肥量	40～60kg/10a



## ノビエ対策に石灰窒素

ノビエが残草してしまい、種がこぼれてしまうと翌年の発生は確実です。

石灰窒素を刈り取り後のほ場に散布することで、ノビエの発生を促し、冬期間の寒さに当てて枯死させることができ、翌年の発生密度を抑えることができます。

ポイント

- ◎散布量：50kg/10a
- ◎石灰窒素散布後のすき込みは必要ありません。
- ◎肥料分が次年度に持ち越されるため、翌年の基肥窒素は20%ほど減肥します。

## ラウンドアップマックスロード秋散布で除草とネズミ穴対策

稲刈り後、ラウンドアップマックスロードを散布することで、翌春の草刈り作業を省略することができます。野ネズミの棲み処が無くなりネズミ穴を少なくすることができます。



ポイント

【ネズミ穴対策】  
ネズミが冬眠準備のため土中に隠れる前までに散布（10月中旬頃まで）。  
【雑草対策】  
雑草の葉が緑色のうちに散布すれば秋の低温時でも安定した効果を発揮。

※ラウンドアップマックスロード秋散布は翌年産米の使用農薬に数えられるので注意してください。



No.6

# 農業技術情報

令和2年9月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所  
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



## 適切刈り取りと丁寧な乾燥調製で 高品質に仕上げよう

### 生育状況 仙北地域振興局農林部農業振興普及課より

管内の出穂盛期は8月3日（平年8月3日）で平年並みとなっています。

8月20日現在のあきたこまちの生育は、穂数は437本/m<sup>2</sup>（平年比98%）、葉数（止め葉）は12.6葉（同差-0.1葉）でした。着粒数は31.6千粒（同比99%）となっています。

近年は栽植密度が疎植傾向であることから、m<sup>2</sup>当たり穂数はやや少なくなっていますが、1株当たり穂数は十分に確保されています。このため、1株穂数が多い場合は積算気温到達日より、刈り取り適期が数日遅れるので、穂や籾の熟色が黄色く色づいているかを確認してから刈り取りしてください。

	出穂期	穂数		葉数		着粒数	
		本/株	本/m <sup>2</sup>	葉	粒/穂	千粒/m <sup>2</sup>	
本年値	8月3日	23.1	437	12.6	72.5	31.6	
平年値	8月3日	22.2	445	12.7	72.7	31.9	
平年比(%)	-2	104%	98%	-0.1	100%	99%	
前年値	8月1日	26.7	538	12.8	68.6	36.4	
前年比(%)	±0	87%	81%	-0.2	106%	87%	

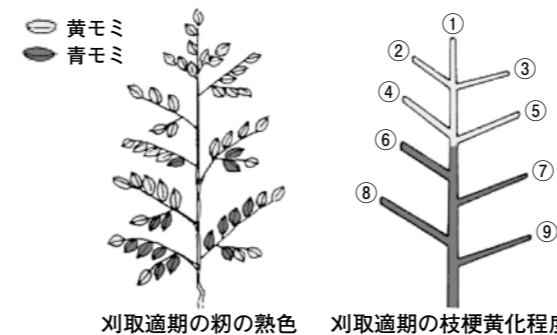
## 出穂期別積算気温到達予想日

アメダス地点	積算気温	出穂日				
		7月27日	8月1日	8月3日(盛期)	8月5日	8月10日
大曲 標高：30m	950℃到達日	9月2日	9月7日	9月10日	9月12日	9月19日
	1,050℃到達日	9月7日	9月12日	9月15日	9月17日	9月24日
角館 標高：56m	950℃到達日	9月3日	9月8日	9月10日	9月13日	9月19日
	1,050℃到達日	9月7日	9月13日	9月15日	9月18日	9月25日
田沢湖 標高：230m	950℃到達日	9月4日	9月10日	9月12日	9月14日	9月20日
	1,050℃到達日	9月9日	9月15日	9月17日	9月20日	9月26日

※9月1日までは本年値。9月2日以降は平年値で試算。

刈り取りの注意点	適期に刈り取りを過ぎると青米や胴割米の増加につながりますので、適期刈り取りに努めましょう。
	○早生種（あきたこまち・秋のきらめき）……………出穂後45日頃 出穂後気温 950℃～1,050℃ ※積算気温1,100℃を超えると胴割れ粒が増加する。
	○中晩生種（ゆめおぼこ・めんこいな・ひとめぼれ）……………出穂後50日頃 出穂後気温1,050℃～1,150℃ ※積算気温1,200℃を超えると胴割れ粒が増加する。

### 刈り取り判断の目安



- 1) 籾の熟色は、通常年であれば葉や穂首が緑色であっても、籾の黄化程度が90%（黄白色+黄色）の頃が適期となります。
- 2) 枝梗の黄化が5番目の枝梗まで進んだ頃とします。ただし、枝梗による判断は年次変動が大きく、高温年は胴割れ粒が増加することがあるので注意しましょう。

# 収穫に向けて ~シーズン前に作業機械の点検を必ず行いましょう~

## ●機械収穫作業の注意点

- ・収穫時の籾水分は25%以下が望ましく、刈り取りは稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃を目安にします。
- ・品種切替時はコンタミ(異品種混入)を防ぐため、籾搬送オーガ等の清掃を徹底して行いましょう。
- ・シーズン中は各部の点検やチェーン等への注油を怠らないようにしてください。
- ・作業中のトラブルに際しては、作業事故防止のため、必ずエンジンを止めてから点検作業に入るようにしてください。
- ・雨天の直後や早朝の収穫は穀粒損失やコンバインの詰まりの原因となるので避けましょう。

## ●刈取前に作業機の点検を行いましょう

- |  |   |
|--|---|
| <b>◎コンバイン</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・刈刃にガタ・刃こぼれがありませんか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・バインダーは確実に作動しますか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・オーガ、昇降機にゴミはありませんか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・クローラーの張りは適切ですか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・チェーン、ベルト類は緩みがありませんか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・油圧装置などに注油はしていますか。 <input type="checkbox"/></li> </ul> | <b>◎籾摺機</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もみ殻は確実に排出されていますか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・ロールに摩耗、片減りはありませんか。 <input type="checkbox"/></li> </ul> |
| <b>◎選別機</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・くず米に整粒が入っていませんか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・選粒アミに穴空きはありませんか。 <input type="checkbox"/></li> <li>・計量機の重量測定は正確ですか。 <input type="checkbox"/></li> </ul>  |   |

# 農作業事故を無くしましょう!!

- ①後進時はより慎重に運転しましょう。  
コンバインの事故で最も多いのが転落・転倒事故です。  
特に後進時に事故が多く発生する傾向にあります。
- ②納屋等建物からの出入時には十分注意しましょう!  
コンバインによる挟まれ事故は納屋等からの出入りに発生しています。

①コンバインの大きさや死角を把握している		①機械を動かすときには必ず補助者がいる	
②補助者と安全に関する話し合いをしている		②周囲の安全を確認している	

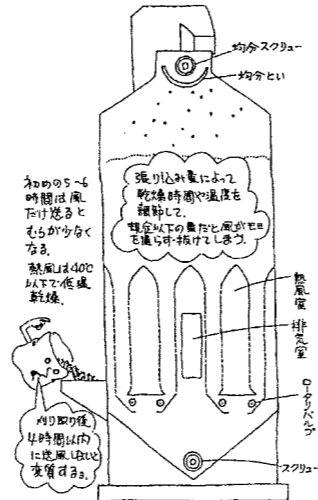
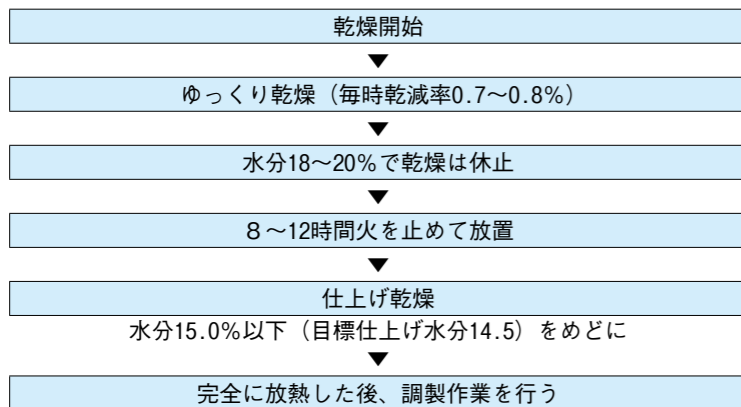
- ③点検整備・清掃作業はエンジン停止状態で!!  
コンバインの巻き込まれ事故は点検整備・清掃中に多く発生しています!  
そのうちエンジンの非停止が事故要因として多いです。

①点検・整備時はエンジンを停止している	
②服装は体に合ったもの、農作業に相応しい物を着用している	
③そで・えり・首に巻くタオル等が回転部分に巻き込まれないように注意する。	

## 乾燥作業 高温登熟籾は急乾燥厳禁!!

- 1. おいしさの決め手は、「低温二段乾燥」です。  
・収穫した生籾は、水分が高いままコンテナや樹脂袋に保管すると7～8時間で変質する恐れがあります。速やかに乾燥作業に入りましょう。  
・一般に高温で火力乾燥すると食味が低下しやすくなります。これは、お米に含まれる脂肪の分解が始まって、貯蔵中の食味低下をまねくためです。また、高水分籾ほど低温でゆっくり乾燥する必要があります。

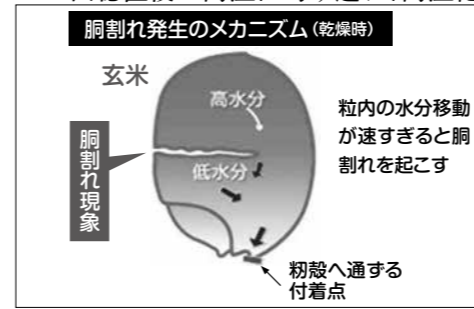
《低温二段乾燥法》



- 2. 乾燥作業は気温と加熱温度のバランスが大切です。  
乾燥機での乾燥は気温の高さや湿度によって、仕上がりが変わります。一般に、早生品種(あきたこまち、秋のきらめき)は胴割れが発生しやすいため、先の低温二段乾燥を絡めてゆっくりと乾燥させることが大切です。  
青米混入の多少によって、仕上がりに水分に変化があることも考慮します。  
加熱乾燥が終了してから、放冷中に乾燥が進んだり、戻ったりします。これは保管中の建物・乾燥機の影響などの影響もありますが、最も与える影響が大きいものは、乾燥籾に含まれている青米の混入率です。

玄米100粒中の青米混入数	乾燥終了後の水分変化	乾燥停止設定玄米水分	乾燥終了水分値
11粒以上	乾燥が戻る (水分率が上がる)	14.5%	15.0%
6~10粒	水分変化が少ない	15.0~14.8%	15.0%
0~5粒	乾燥が進む (水分率が下がる)	15.5~15.3%	15.0%

- 3. 胴割れ米に注意しましょう。  
胴割れは、玄米の内部に亀裂が生じる現象です。  
出穂直後の高温、刈り遅れ、高温乾燥や急速乾燥、不適切な貯蔵管理、精米時の温度などが主な原因です。  
・刈り取り後の生籾は水分が高いため、乾燥機に張込後、すぐに乾燥したり、高い温度で乾燥すると胴割れ米が発生しやすくなります。乾燥は張込後2～3時間送風で循環させた後、加温乾燥をしてください。  
・胴割れ原因で多いのは籾摺り作業です。乾燥終了後は一旦籾を常温に戻してから籾摺り作業を開始します。籾が温かい状態での籾摺りや、籾摺り機のロール間の隙間が適正でないとき肌ずれや、胴割れの原因になります。



## 籾摺り・米選別作業

籾摺り作業では肌ずれ米や籾の混入を減らし、米選別作業では被害粒や未熟粒を除去し、全量1等米の生産を目指します!

## 籾摺り作業の注意点

- ・籾摺り機を水平に据え付け、主軸の回転数を確認の上でロールの間隔を1回通して脱ぶ率80～85%になるように試し摺りして調節します。
- ・登熟不良で未熟粒が多い場合、無理にロール間隔を狭めないこと。ロール間隔は標準にして脱ぶ部に詰まりを生じない程度に籾の供給量を調節します。

## 米選作業の注意点

- ・被害粒・死米・未熟粒などの不良粒をより多く除去して整粒歩合を高める最終作業ですので、能率重視は禁物です。
- ・高品質米に仕上げるために1.90mmの篩い目を推奨していますが、玄米流量を多くすると選別能率が低下しますので、能力に合わせた作業を行きましょう。

## コンタミ(異品種混入)対策 異品種混入はJAS法違反です!!

- ・店頭で売られている玄米(精米)は生鮮食品に分類され、名称、原料玄米(産地・品種・産年・使用割合)内容量、精米時期、販売者の表示が必要となります。
- ・製品に異品種が混入した場合はJAS法違反に問われます。

JAS法で定められた表示(例)			
名称	精米		
産地	品種	産年	使用割合
原料玄米	単一原料米		
複核原料米	〇〇県	〇〇ヒカリ	〇〇年産
国内産	10割		
(〇〇県 〇〇ヒカリ 〇〇年産 6割)			
未熟産米	2割		
内容量	〇kg		
精米年月日	〇〇.〇〇.〇〇		
販売者	株式会社〇〇直轄 〇〇県〇〇市 〇-〇 電話〇〇〇(〇〇〇) 〇〇〇〇		

特に複数品種を作付している生産者は刈取・乾燥・選別時は作業機械の清掃を徹底し、異品種の混入に細心の注意を払ってください!!

### ●集荷規格

- 1. 仕上げ水分目標値 14.5%
- 2. JAS米の対象等級 1～3等
- 3. 対象品種 あきたこまち、ゆめおぼこ、めんこいな、ひとめぼれ、ササニシキ、淡雪こまち、秋のきらめき、つぼぞろい、萌えみのりの9品種
- 4. 量目(紙袋)は皆掛重量30.5kg (定量フレコン)の正味重量は1,029kg(余マス含む)
- ◎JAS要件
  - 1. 品種が確認できた種子(または苗)により栽培した米穀種子更新100%とする(産米改良協会からの購入種子)。
  - 2. 登録検査機関にて、検査を受けた米穀
  - 3. 生産基準に基づき栽培され、栽培履歴記帳がなされた米穀